

## ユーラシアの近代と新しい世界史叙述

Eurasia in the Modern Period : Towards a New World History

羽田 正 (HANEDA MASASHI)

東京大学・東洋文化研究所・教授



### 研究の概要

国民国家や「ヨーロッパ（西洋）とアジア（東洋）」という既存の歴史叙述の単位にとらわれず、時間軸上の比較、多様な場同士の多面的な比較を通じて総合的に把握する。

ユーラシア、さらには世界を一体とみる立場に立つ新しい世界史を構築するにはどのような叙述方法がふさわしいかを考える。

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：世界史、異文化交流、比較歴史学、グローバル・ヒストリー、ユーラシア

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進み、人々に「地球市民」意識が求められる現代においては、世界の歴史を一体のものとして把握・理解することが必要である。「ヨーロッパ」と「非ヨーロッパ」を区分する従来の世界史叙述は、この点で不十分だが、日本はもちろん、世界的に見ても、「地球市民」のための世界史叙述はまだ存在していない。

### 2. 研究の目的

この共同研究では、国民国家や「ヨーロッパ（西洋）とアジア（東洋）」という既存の歴史叙述の単位にとらわれず、ユーラシア、さらに世界を一体と見る立場で新しい世界史を構築する方法を追究する。

### 3. 研究の方法

18-19世紀のユーラシアで、港町や内陸の隊商都市を基点として設定される多様な場（都市、地域社会、国家、海域世界など）における異文化交流（人・モノ・情報の受容、融合、拒絶）の実態を、史資料に基づいて具体的に明らかにする。そのうえで、研究成果を、同一の場における時間軸上の比較、多様な場同士の多面的な比較を通じて総合的に把握し、18-19世紀のユーラシアの歴史を一体としてとらえる視点の獲得を目指す。

研究成果は日本語と英語でホームページを通じて随時発信する。

### 4. これまでの成果

共同研究開始時には、様々なバックグラウンドをもつ歴史研究者が、世界史叙述に関心を持ちながらも、研究を進めるための確たる指針なしにただ集まっただけの状態だった。しかし、3年を経て、参加者全員が一つのチームとしての自覚を強め、新しい世界史叙述について考え、それを実現するために研究を進める態勢が整ってきた。共同研究の枠組みで開催される数多くの研究会は、現代を生きる我々にとって有意義な世界史とは何かということを改めて問い直すためのプラットフォームとして機能している。日本における歴史研究は、地域・時代別に細分化され、全体について語る場を長く持たなかった。この共同研究がそのためのプラットフォームとして確立したことは大きな意味を持ち、現在までもっとも大きな成果である。このプラットフォームを基盤に、大阪大学の歴史教育研究会など関連グループとの連携も模索されている。以下に、これまでの主要な成果を簡潔に記す。

#### 1) 各種研究会開催

研究分担者や連携研究者、さらには研究協力者のイニシアティブによって、世界史を考える際に重要なテーマを設定し、分野・地域横断的な研究会を開催している。これが本共同研究のもっとも重要な日常的活動である。主要なテーマとしては、支配、奴隷、海賊、女性、商館、価値などが挙げられる。これまでに開催された研究会の数は次の通りである。

平成 21 年度 7 回、平成 22 年度 18 回、平成 23 年度 20 回。

また、新しい世界史をどのように認識し、描くべきかといった全体の方向性に関する総論的な研究会も、21 年度 1 回、22 年度 2 回、23 年度 2 回開催した。

さらに、外国人研究者を交えた研究集会を数多く開催し、国際的な場においても対等な立場で世界史を考える姿勢を維持しながら、対話を進めてきた。その数は、21 年度 4 回、22 年度 4 回、23 年度 7 回である。これらの会議を通じて、本共同研究で議論されている新しい世界史という考え方に関心を持つ外国人研究者は確実に増えており、復旦大学やプリンストン大学の研究者からは、共同での会議開催の提案を受けている。

2) 新しい世界史についての基本的な考え方の確立と研究方法の提示

上記研究会での議論を通じてできあがったプラットフォームにおいて、新しい世界史認識についての基本的な考え方が固まった。それは以下の通りである。「世界はひとつという認識は重要である。と同時に、世界の解釈・理解には多様性が確保されねばならない。世界史叙述はひとつに収斂されるべきではなく、地球市民が対話を通じて常に議論を深めながら、自らの世界史像を構築することが重要である」。

この基本認識に基づき、具体的にどのような方法で新しい世界史を叙述すべきかについて、研究代表者の羽田は、『新しい世界史へ』という書物を著した(2011 年 11 月刊行)。これは、この共同研究の今後のマニフェストとしての性格を持つものだが、学界に対してだけではなく、一般社会にも強いメッセージを発している。

3) 若手研究者の組織的育成

この共同研究では、初年度末より若手研究会を設け、大学院生・ポスドクが自らの研究テーマを題材にして、中堅・シニアのメンバーとともに、世界史叙述のあるべき姿を模索してきた。また、彼らに国際的な研究集会の企画・立案と実行を任せてきた。その結果、何人かの若手研究者は、大きく成長し、例えば、カナダの研究機関で共同研究員となる者(鈴木英明)や博士論文が受賞する者(福岡万里子、第 2 回東京大学南原繁記念出版賞)のように、将来が囑望される人材が現れている。

4) 研究活動の積極的な広報

初年度から和文、英文でホームページを立ち上げ、研究の目的と方法、参加者などの基本情報を広報するとともに、最新の研究成果を活動報告として一般に公開している。

5. 今後の計画

1) 多彩な研究会を引き続き開催し、新しい世界史の立場に立った過去の解釈を叙述する方法を考える。

2) 諸外国の研究者と世界史認識について議論する機会を何度か持ち、新しい世界史という考え方の共有を目指す。

3) 10 巻程度のモノグラフ・シリーズをはじめ、英語、日本語での論文集や資料集などを刊行し、新しい世界史の見方の普及を図る。

4) 大学で新しい世界史を教えるためのテキスト作成を試みるとともに、新しい世界史についての授業を開始する。

5) 引き続き、ウェブサイトで研究会での議論の内容などの情報を英文、和文で発信する。

6. これまでの発表論文等(受賞等も含む)

羽田正『新しい世界史へ—地球市民のための構想』岩波書店、2011 年、220 頁。

羽田正「东亚海域史的实验」復旦大学文史研究院編『世界史中的东亚海域』、2011 年、1-10 頁。

岩井茂樹「朝貢と互市」『東アジア近現代通史 1 東アジア世界の近代 一九世紀』岩波書店、2010 年、134-153 頁。

島田竜登「歴史学はすでに「国境」をこえつつある—グローバル・ヒストリーと近代史研究のための覚書—」『パブリック・ヒストリー』8 巻、2011 年、1-13 頁。

松井洋子『ケンペルとシーボルト—「鎖国」日本を語った異国人たち』山川出版社(日本史リブレット 62)、2010 年、94 頁。

松方冬子『オランダ風説書—「鎖国」日本に語られた「世界」—』中公新書、中央公論新社、2010 年、216 頁。

Miki Sugiura, "Specialization and the Division of Merchant Functions in Amsterdam and its Hinterland in the Eighteenth Century", in Robert Lee eds, *Port-Cities and their Hinterlands: Migration, Trade and Cultural Exchange from the Early Seventeenth-Century to 1939*, Routledge Explorations in Economic History, forthcoming 2012.

ホームページ等

<http://haneda.ioc.u-tokyo.ac.jp/eurasia/index.html> (日本語)

<http://haneda.ioc.u-tokyo.ac.jp/english/eurasia/> (英語)